
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

2000. 7. 31

No. 45

特別展「スコルト・サーミの世界」開催

スコルト・サーミは、数十年に及ぶ苦難をへて得た安住の地、フィンランド・イナリ湖周辺に住む。時の流れとともに文化が変容するなかで、マトレーナ・フォッフアノフ氏は、スコルト・サーミの伝統文化を今に伝える。



特別展「スコルト・サーミの世界」を開催して

サーミに関するメモとともに

はじめに

アイヌ民族博物館は、1976年の設立以来、アイヌ文化の伝承・保存、及び調査・研究、一般への公開事業を行うとともに、海外先住少数民族との文化交流も積極的に行ってきた。特に、北欧のスカンジナビア半島を中心に居住するサーミとの交流は、その嚆矢であり、1984年には、フィンランドのイナリにあるサーミ博物館（1999年、国立サーミ博物館として、リニューアル・オープンする）と姉妹博物館提携を結び、爾来、両館への相互訪問など、活発な交流が続いている。

今回、そうした交流の一環として、サーミ博物館より、スコルト・サーミ資料190点を借用して、4月28日から7月31日まで、特別展「スコルト・サーミの世界」を開催した。

サーミ略述

周知のとおり、サーミは、北欧のスカンジナビア半島に居住する少数民族で、古くは「ラップ」と呼ばれていた。「サーミ」は自称である。かつて、サーミはその生活形態により、「山岳サーミ」「森林サーミ」「海岸サーミ」の3グループに分けられていたが、現在では、その使用する言語により、東サーミ語、西サーミ語に大別され、さらに、東サーミ語は、スコルト・サーミ語、イナリ・サーミ語など、西サーミ語は、北サーミ語、南サーミ語、ルレ・サーミ語などに分かれ、それぞれ独自の生活文化を有している。

共通の文化の特色として、古い時代ではトナカイの皮革、骨等を生活用具の素材として用い、現在においては、それらは手工芸品の素材として用いられていることがあげられる。

1970年代後半、「サーミのルネサンス」といわれた文化復興運動が起こり、現代化した文化のなかに伝統文化の見直し、伝承・保存が盛んとなった。フィンランドの北ラップランド地方

においては、サーミ語は準公用語として認められ、サーミ語によるラジオ放送も行われている。

スコルト・サーミは、東サーミ語に属するグループで、ロシアのコラ半島の最初の居住者として、古くはコラ半島のみならず、現ロシア、フィンランド、ノルウェー国境にかけて、広く居住していた。1939～40年のフィンランド・ロシア間の冬戦争及びその後の継続戦争、そして、第二次世界大戦によって、フィンランドが、北極海にまで面していたペツサモ地域をロシアに手放すこととなり、スコルト・サーミたちは、その故郷を失うこととなった。

大戦後も、長い間、疎開生活を余儀なくされたが、後にフィンランド・イナリ湖周辺のセヴェッティヤルヴィ、ネリム、ケヴァヤルヴィ地域に安住の地を得た。

スコルト・サーミは、古い時代にロシア正教（東方正教）に改宗し、信仰心の厚いことで知られている。他の西側のサーミと異なる文化的特徴として、ロシア風の民族衣装を持ち、スクウェア・ダンスを踊り、ビーズ工芸を施し、「レウド」と呼ばれる伝統歌謡を持つことなどがあげられる。

「レウド」は、サーミの伝統歌謡「ヨイク」に含められることもあるが、伝統的な「ヨイク」が即興を基にし、歌詞をほとんど持たないのに対して、「レウド」は長い叙事詩的な形態をとることが多く、二者を区別して扱う場合もある。

戦後から70年代にかけて、他のサーミ同様、各国の民族政策（フィンランド人化、ノルウェー人化……）に押さえつけられる形で、スコルト・サーミの文化も危機を迎えたが、現在では、スコルト・サーミ語が学校で教えられ、各種伝統文化も年輩者だけでなく、若年層にも継承されつつある。

特別展開催

特別展の展示構成は、サーミ博物館館長タル

モ・ヨンパネン氏と同館学芸員アルヤ・ハルティカイネン氏が行い、当館学芸員が補佐した。本特別展で展示した170点の民具資料と20枚のパネルは、昨年、サーミ博物館が、スコルト・サーミがイナリに定住して50年を迎えたのを記念して開催した「スコルト・サーミの生活」展において展示したものである。

展示構成は、スコルト・サーミの故郷ベツサモの地での生活から、イナリでの生活の様子までを、先の民具資料・パネルにより紹介したもので、これらの資料からは、時の為政者により流浪を余儀なくされた頃の苦悩と、イナリの地における安住のやすらぎが伝わってくる。

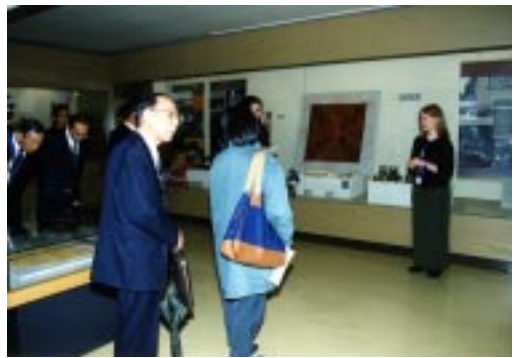
開会に合わせて、4月28日に開催された記念事業では、タルモ・ヨンパネン氏とアルヤ・ハルティカイネン氏が、それぞれ「サーミの歴史と文化」について講演を行い、スコルト・サーミ、マトレーナ・フォッファノフ氏が伝統工芸の実演と「レウド」を披露した。

今回の特別展では、民具資料の素晴らしさもさることながら、20枚のパネルに記されたスコルト・サーミの50年の歴史が強く印象に残った。「歴史」を展示する一手法として、参考を多とした次第である。

おわりに

本特別展開催にあたっては、財団法人北方圏交流基金にご協賛をいただいたのをはじめとして、多くの人たちにご協力いただいた。なかでも、北海道フィンランド協会専務理事井口光雄氏には、サーミ博物館との連絡等で終始ご尽力を賜った。また、アイヌ文化交流センターの佐山 愛氏には、取交文書の翻訳でご協力をいただき、北海道フィンランド協会の水本秀明氏には、展示の段階から開会式、記念事業と、通訳としてご協力を仰いだ。記して、深甚なる謝意を表する次第である。

(秋野茂樹)



アルヤ・ハルティカイネン学芸員による資料解説



展示会場にて、マトレーナ・フォッファノフ氏による伝統工芸品製作実演



スコルト・サーミの「現在」の展示



記念事業、タルモ・ヨンパネン館長の講演

レポート4

野山の雪解けとともに一斉に草木が芽吹き、野山を緑色に染めた春も終わり、ギョウジャニンニクやニンソウ、フキなどの山菜でにぎわいをみせたアイヌ有用植物コーナーも落ち着きを取り戻している。今年の6月・7月の記録的な暑さは白老においても例外ではなく、有用植物コーナーの植物も夏バテ気味。そんな中で勢力をのびしているのがヤブマメである。今回のアイヌ有用植物コーナーレポートは、暑さにも負けずとても元気なヤブマメを紹介したい。



写真1：ヤブマメの葉

ヤブマメ

ヤブマメは、別名ツチマメやギンマメとも呼ばれ、北海道から九州、朝鮮半島、中国に分布する。日当たりの良い道端や草地、林縁などに生える草丈80～100cm位のマメ科の植物で、蔓性の一年草。葉（写真1）は3複葉からなる細長い心形で、地上と地中に花を付ける。地上花（写真2）は淡紫色の蝶形花で長さが1.5～2cm程度であるのに対し、地中の閉鎖花は、1cm程の小さなもので、土中で結実する。豆果も地上と地中に付けるが、地中果の方が大きく、淡桃色の円形で一種子を入れる（写真3）。



写真2：ヤブマメの地上花

ヤブマメの地中果にはビタミンB₁、ビタミンB₂などビタミン類の含量が高く、「ヤブマメの栄養分析結果」（表1）にあるように野生品、栽培品の栄養価に違いがほとんどみられないことから、安全性にも問題のない、栽培山菜として注目されてもよい植物のひとつである。

表1：ヤブマメの栄養分析結果

	地下果実 野生品	地下果実 栽培品	乾物換算 野生品	乾物換算 乾燥品
水分	68.7 g	42.8 g	0.0 g	0.0 g
たんぱく質	15.1 g	15.8 g	29.4 g	27.6 g
脂質	0.7 g	0.3 g	13.1 g	11.0 g
炭水化物	27.2 g	31.8 g	53.0 g	55.0 g
灰分	2.3 g	3.3 g	4.5 g	5.8 g
エネルギー	230 kcal	247 kcal	445 kcal	432 kcal
カルシウム	42 mg	47 mg	82 mg	82 mg
リン	240 mg	240 mg	470 mg	420 mg
鉄	4.0 mg	5.3 mg	7.8 mg	9.3 mg
ナトリウム	3 mg	3 mg	6 mg	5 mg
カリウム	1000 mg	1200 mg	1900 mg	2100 mg
マグネシウム	98 mg	130 mg	190 mg	230 mg
食物繊維	8.4 g	11.3 g	16.4 g	19.8 g
試料 100g 中				

ヤブマメをアイヌ語で「アハ(aha)」または「エハ(aha)」とよび、アイヌは地中果を食料とした。味は甘栗のようにホコホコとして美味しく、煮たり、ご飯と一緒に炊くなどして食べる。

(北海道立衛生研究所薬理毒性部・アイヌ民族博物館編『アイヌ民族の伝統有用植物を利用した食生活改善による健康増進事業報告』1996より)

ヤブマメを使った料理

【アハチサツスイエブ aha cisatsuyep ヤブマメのご飯】

材料：ヤブマメ・米または稗・塩・魚脂

- 1) 掘ったヤブマメをきれいに洗い土などの不純物を取り除く。米は研いで水に浸しておく。ヤブマメの表皮には起毛状の焦茶色をした薄皮が付いているがそのままが良い。

乾燥品を使う場合はあらかじめ水にもどしておく。

- 2) 十分に水を吸収させた米とヤブマメとを混ぜ合わせ、水と少量の塩を加えて炊く。

水は、米のみを炊くときより少し多めに入れる。

米とヤブマメの分量の比率は、米5に対してヤブマメ1ぐらいが丁度良い。

- 3) 炊きあがったらヘラで軽くかき混ぜ、タラなどの魚脂を全体に混ぜ合わせ出来上がり。魚脂が手に入らなければ代用品としてサラダ油を使用しても良い。

【アハラタシケブ aha rataskep ヤブマメの煮物】

材料：ヤブマメ・塩・魚脂

- 1) 掘ったヤブマメをきれいに洗い土などの不純物を取り除く。

乾燥品を使う場合はあらかじめ水にもどしておく。

- 2) たっぷりの水でヤブマメを煮る。

- 3) 沸騰したら塩を適量入れる。

- 4) 煮えたら水切りをし、蒸す。

- 5) 蒸したものに脂をつけ、出来上がり。

ヤブマメの採取時期は、発芽前の初春と晩秋の年2回で、枯れた葉や茎を目印に、鹿の角や二股の木を利用したシッタブ (sittap) と呼ばれる掘り具が使われた。地中果は、土と同じような色をしているため採取には慣れるまで少し手間がかかる。たくさん採れたときには家族が喜んで誉めてくれたので、ヤブマメ掘りは春先の楽しみのひとつでもあったという。多く採取できるように願いを込めて、エハタウポポ (eha ta upopo) と呼ばれるヤブマメ掘りの歌を歌いながら作業をする地域もあったという。

エハタウポポ (eha ta upopo ヤブマメ掘りの歌)

- 1) 静内地区・浦和

eha charake korachi

(エハ チャラケ コラチ)
ヤブマメ 撒く ように

suma charake korachi

(スマ チャラケ コラチ)
石ころ 撒く ように



写真3：ヤブマメの地下茎と莢(さや)



写真4：ヤブマメ地中果



写真5：シッタブ (sittap ヤブマメを掘る道具)

- 2) 長万部地区

eha uk an ya i nak wa

(エハ ウク アン ヤ イ ナク ワ)
ヤブマメあれば 私は帰らないよ

eha isam a tane ku san

(エハ イサム ア タネ ク サン)
ヤブマメなけりゃ 私は帰る

en ko turuse turuse

(エン コ トウルセ トウルセ)

おいらに 飛んでこい 飛んでこい

(日本放送協会編『アイヌ伝統音楽』1965より)

(村木美幸)

チセの展示製作

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が主催するアイヌ工芸品展事業「馬場・児玉コレクションにみる 北の民 アイヌの世界」が広島県立民俗資料館（7月14日～8月20日）と名古屋市博物館（9月9日～10月9日）で、それぞれ開催された。

アイヌ工芸品展とは、「国内外の博物館が所蔵するアイヌ伝統工芸品を展示・紹介し、国民のアイヌ文化に対する理解の促進と、アイヌの人々の伝承意欲の向上を図ろうとする事業です」と趣旨説明にある。国民とアイヌ、どちらにせよアイヌ文化の普及が本事業の主たる目的である。

特別展はタイトルの通り、国指定重要有形民俗文化財である「馬場コレクション」と、国内最大規模の「児玉コレクション」を中心とした展示構成となっている。これらのアイヌ文化財の多くが信仰と関係してきたものなので、世界観もまた重要なテーマとして紹介された。

チセの展示

この展覧会で目立つ存在は、何と言ってもチセの展示である。文化財ばかりが紹介されるなかであって、アイヌの伝統的なすまいチセは、来館者にとってわかりやすい再現展示となった。ただし、これはあくまでも展示テーマや内容を理解するための補助的な役割である。

国内でのアイヌ展示において、常設展示（屋内）でチセが再現展示されている博物館は、国立民族学博物館をはじめ、北海道開拓記念館、大阪人権博物館の三館がある。どれも母屋の一面が切り取られた形で、室内の様子がわかるよう配慮された展示方法で、それ以外は、ほぼ完全な状態で被覆されている。また、使われている材料にしても、その地域で伝統的に利用してきた素材が多く見られる。

移動展でのチセ展示

この展覧会で要求されたことは、なによりも

現場での生産性である。上記、常設展でのチセの再現展示は、新設、またはリニューアルの際に現場に材料を持ち込み、技術者が現地に赴き伝統的なチセとして、製作されたものである。一方、今回の移動展のために製作したチセは、床や壁などの面的な部分をパネル化して、現場でこのパネルを一体的に組み立てる工法とした。更に柱や梁などの主要構造材も部品化して部材を組み合わせるといった具合である。これにより最少人数で短時間で展示できるチセ（5,600×3,600）を製作した。この構造は、スミソニアン国立自然史博物館で開催された特別展「Ainu - Spirit of Northern People」で展示されたチセをモデルとしている。

特徴としては、(1) 壁パネル構造、(2) 床パネル構造 (3) 小屋組（屋根）構造、(4) 接合金具物、以下、ポイントを簡単に説明した。

(1) 壁パネル構造

被覆材を貼り付けるための下地の製作は、軽量かつ強度が要求されるため、建具屋に依頼した。壁パネルは、平物とL字型の2つのタイプがある。接合金具物による突付け形式で連結するため、下地製作の段階で接合金物を埋め込む。被覆材（茅）の接着には、木工ボンド（CH18）を使用した。この製作において、一番手間がかかったのが、茅の取り付けである。幅3cmの下地に片側2.5cmの厚さに茅を接着する。選別し



壁パネルの接合

た茅を使用して、下地が露出しな
い最小の厚さが2.5cmであった。
表面加工はクリヤー無着色仕上げ
とした。パネル一枚の平均サイズ
は、高さ1m80cm、幅80cmで、両
面に被覆した場合の最大重が25kg
となった。

(2) 床パネル構造

チセのステージとなる床パネル
は、標準的な工法で、天板と側板
を接合した。このパネルは莫塵で
被覆されるので、複雑な加工を必
要としない。

(3) 小屋組（屋根）構造

アイヌ家屋でもっとも特徴的な、屋根を形づ
くる小屋組は、被覆せずに小屋組を見せる展示
とした。開催館の天井の高さを基準に展示設計
し、ミニチュア模型（十分の一）を製作した。
それを参考に主要構成材の仕口や継手の加工を
行った。構造材は、主にカラマツ材を使用し、



小屋組



屋内の展示



製作中のチセ

結束材には、シナ縄とブドウ蔓を使用した。

(4) 接合金物

この製作では、ひら金物、かど金物、差込金物
の3種類の接合金物を使用した。屋根の垂木
や細材の接合には、造作ビスを使用した。これ
らの金物が仕上げ面に露出することはなく、す
べてシナ縄などの結束材で隠されている。

以上が特徴となるポイントの説明である。

最後に屋根が被覆されなかった理由には、大
量な茅の処理や運搬の問題や展示替えでの時間
的な制約があげられる。また、従来のように再
現展示がリアルに完結してしまうことに対して
の違和感も理由の一つである。確かに、屋根が
被覆されていない展示は、誤解を招きやすいで
あろう。しかし、それを補うだけの資料の提示
があれば、それは問題ではないとする、展示す
る側の主観的な認識もある。今後は展示がどの
ような成果を上げるかといった「展示評価」も
新たな取り組みとして必要である。また、それ
以前に博物館のコレクションの形成過程や内容
を再検討する必要があるのではないだろうか。

この展覧会の趣旨が、国民のアイヌ文化の理
解、それとアイヌにとって、アイデンティティ
を確認できるような展示でなければならないと
あるからである。

(野本正博)

博物館短信

4 月

- 1日 月初カムイノミ
夏季営業体制(4~10月, 開館時間8:00
~17:00)
組織変更=経理課を廃し, 従来の4課か
ら総務課, 伝承課, 学芸課の3課制を実施
- 10日 北海道開発局一行来館
- 17日 児玉コレクシヨン白老町有形民俗文化財
指定授与式出席
- 19日 パトリシア・サビーネ・豪州タスマニア
博物館館長一行来館
- 20日 日胆地区博物館協議会総会出席(門別)
- 23日 タルモ・ヨンパネン・フィンランド・サ
ーミ博物館館長一行来館
- 28-7月31日 特別展「スコルト・サーミの世界」
展開催
- 29日 チフサンケ(舟下ろしの儀式)

5 月

- 1日 安全祈願祭カムイノミ
- 5日 スミソニアン貸出資料返却
デイビッド・デュブレイ/チサト・デュ
ブレイ(米スミソニアン博物館)来館
- 13日 オヒョウ・シナノキ樹皮採取(様似)
- 14日 第一回アイヌ文化教室「アイヌの植物利
用について」開催(講師:山岸喬・北見工
業大学教授, 受講者35名)
- 17日 中国広州市観光視察団一行来館
- 20日 1999~2000ロータリー第2510地区大
会古式舞踊公演(札幌市=15名)
- 21日 聞き取り調査(白老町内=村木美幸)
- 23日 白老民族芸能保存会理事会・総会
- 27日 北海道アイヌ古式舞踊連合保存会総会出席
- 30日 第1回理事会・評議員会開催

6 月

- 1日 月初カムイノミ
北海道教育庁胆振教育局初任者研修「ア
イヌ民族の歴史と文化」受入(23名)
聞き取り調査(室蘭=村木美幸)
- 2-4日 全日本郷土芸能協会総会出席
- 9日 聞き取り調査(平取=本田優子, 村木美幸)

- 12日-10月20日 アイヌ工芸品展「馬場・児玉コ
レクシヨンにみる 北の民 アイヌの世界」
資料貸出(広島歴史民俗資料館, 民具資料
134点)
- 15日 聞き取り調査(平取=本田優子, 村木美幸)
- 17日 ベトナム通産大臣一行来館
帯広百年記念館「安政期のアイヌ社会」
講師派遣(帯広=秋野茂樹)
- 18-7月13日 文部省・国立教育会館社会教育研究
所主催「平成12年度博物館職員講習」受講
(東京=野本正博)
- 21日 聞き取り調査(平取=本田優子, 村木美幸)
- 23-24日 オヒョウ・シナノキ樹皮採取(様似)
- 24日 聞き取り調査(平取=本田優子, 村木美幸)
第6回カムイノミ・イチャルバ祭ムック
リ演奏(伊達=高橋志保子・田下千代子)
- 26日 北海道ウタリ協会総会出席
- 27-30日 台湾行政院原住民委員会訪問(台湾・台
北市=山丸理事長, 秋野茂樹)
- 28日 インターネット更新(ドメイン取得に伴
うURL変更, コンテンツ全面更新)

7 月

- 1日 月初カムイノミ
- 5-12日 アイヌ工芸品展チセ展示作業派遣(広島
県立歴史民俗資料館=山丸郁夫, 塩田知治)
- 7日 聞き取り調査(平取=本田優子, 村木美幸)
- 9-16日 アイヌ工芸品展展示協力派遣(広島県立
歴史民俗資料館=児玉マリ, 村木美幸)
- 15日 アイヌ文化振興財団「工芸作品コンテス
ト」審査員派遣(札幌=野本正博)
- 21-24日 森田村第15回石神火まつり・アイヌ古式
舞踊公演(青森県森田村=15名)
- 24日 北京日本学研究中心センター研修団来館
- 26-27日 アイヌ工芸品展伝統料理製作指導(名古
屋市博物館=山丸郁夫・久保紀子)
- 26-10月3日 門別町図書館郷土資料館特別展「ア
イヌ文化の狩猟と漁労」資料貸出(児玉コ
レクシヨン等の資料20点)
- 28日 第二回アイヌ文化教室「アイヌ女性の一
生」開催(講師:萩中美枝, 受講者45名)
文化庁一行来館
- 28-30日 アイヌ工芸品展記念講演会講師派遣(広
島県立歴史民俗資料館=児玉マリ, 野本正
博=随伴)
- 31日 特別展「スコルト・サーミの世界」閉幕

アイヌ民族博物館だより No.45

発行 財団法人アイヌ民族博物館
〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4
電話 0144-82-3914 FAX 0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 2000. 7. 31

ホームページ <http://www.ainu-museum.or.jp>
Eメール museum@ainu-museum.or.jp
印刷 株式会社北海道機関紙印刷所